

大朝町宮迫・小切本『田植雙紙』

久枝 秀夫

田中 瑩一

解題

本書は広島県山県郡大朝町宮迫（旧新庄村宮迫、藩政時代は宮迫村）本郷、小切^{ニギハ}与三郎氏の蔵本である。同氏のもとには、同家伝来の古い田植歌本、とりわけ、これまでに広島県下で発見されたものの中で、いちばん古い年記のある「寛政二年書、宮迫村、小切本『囃し田植歌書』」を所蔵しておられる。私はこれを去る一九八八年六月四日拝見させていただいたのであるが、ここに翻刻する本書もまた、そのとき、はじめて見ることができた一本であった。小切氏はわざわざこれら貴重な二本を拙宅まで持参していただき、心よく翻刻を了解して下さったのである。ご厚意に対し、まずもって感謝の意を表したい。

まず本書の体裁についてふれよう。本書は縦二六・五センチ、横十八センチの大きさ、半紙を二つ折りにした袋とじの体裁で、右側を二ヶ所こよりで綴じてある。表紙も裏表紙もついていない。また、書名も年記もどこにも記されていない無題本である。墨付紙数は三十八丁。私はこれを六月十三日までに一応転写しておいたところ、内容が石見側に流布伝承されている田植歌、中でも田中瑩一氏が翻刻発表されている「中野・新宅屋本、歌乃雙紙——島根県邑智

郡石見町田植歌資料」（『山陰地域研究（伝統文化）』第一号一九八五年二月刊 所収。以下「新宅屋本雙紙」と略称する）の系統本であることを知った。それは本書の歌詞の配列が、「新宅屋本雙紙」の歌章の順に、実に順序よく書き連ねられているからである。（表1参照。そこで、このたびここに翻刻発表するに当り、この無題本を特に「新宅屋本雙紙」の「歌乃雙紙」の名称をとり、さらに「寛政二年本、宮迫村、小切本『囃し田植歌書』」と区別する上から「大朝町宮迫・小切本『田植雙紙』」と呼ぶこととした。

さて、大朝町宮迫は明治二十二年の合併までは宮迫村、以後新庄村宮迫と称し、さらに戦後の町村合併にいたっている。地図をみるとよくわかるように、国道二六一号が宮迫の中心である本郷の集落を通る。大朝町新庄で浜田道とわかれた二六一号は宮迫本郷の小切氏宅の前を北上し、中三坂峠（トンネル）を越えるとそこは島根県、石見田所（瑞穂町）を経て「新宅屋本雙紙」の出た石見町中野付近を通って川本へと向かう。この路線は今も昔も陰陽を結ぶ重要な路線であった。だから大朝町の一角、宮迫一带と石見側とはあらゆる面で、極めて親密な関係にある。例えば、小切氏のお宅のことについていうと、先代の小切札太郎氏の妻は石見町日貫から入嫁された

翻刻

大朝町宮迫・小切本『田植雙紙』

一 ●苗おうゑてわいなツるひめニ
まいらしよう

哥のはつをばまつさんばいニ

いねをうゑてわまいろういせの

いせニまいればまいればふくを

さ月そうとめいまこそみゑた

つれてきたそやこの田のなかゑ

たひのそうとめあいつけされや

志のびおろいてあいつけはなされや

哥のそう志わなる天ぢくへ

哥わ志らねどそう志の大功の

哥のそう志わ京志らかわゑ

ちこがうつやらけさうつたいこ

二ばん

二 ●日か志のとひらおけさあけてみたらば

天からあけるかちからあけるけさよわけほのぼの

あけてみたらばようほのぼのと

三 ●西のほうニひかるわなニのひかりよのう

みよう志ようほ志か月のひかりかやのう

天ニひかるわみよ志ようほ志か
*
なんとひかるわすまるのほ志か
「二オ

四 ●けさとうニないたとりよいとりのこゑやれ

た二た二五石のよいとりのこゑやれ

とりがうとうたよニはちこくと

なんとひよこがまたすのうちニ

五はん

五 ●をもうとのこと志たるそのよわな

をもうことかたるとてさらニねもせずな

かたりすこいてばんやのひとニ

六ばん

六 ●ちよすみすニわあいの志みすこうそな

志のふとのこニやりてねたるようニわ

けさもこい志てちよすのみす

七はん

七 ●ゆうべきたる志のびどわたれをたれとをほへた

京の六ろ志ならの七ろゑ志んそうへうゑとをほへた

なんと七ろゑ天ちニこいお

なんと志ん蔵いつみてわれを
*
こいるか
「二オ

八 ●

八 ●あさひさすやあれほそとニあけてみたらば

こかねニまさりたるあさひこそさすとのう

ねるとゆうてもまくらニあさひ

● 九

九 ● せいどのくるまどをけさあけてみれば

こかねニまさりたあさひこそさあすな

けさのあさひわさもうらやかな

けさの田ぬ志わあさひのちよう志や

● 十

一〇 ● けさよわけほのぼのニやまのはをみたれば

きりやるかすみやるやまのはをみたれば

けさのくもりわてろうがためニ

● 十壹ばん

一一 ● けさきりのまぎれニきちがなきやそうろよ

きぢやらたかやらないてとうりそうろよ

けんやほろろとないてわはねを

十二

一二 ● われらがとのこわうまニのりつれてのう

くさかりニいきあるやらうまニのりつれてのう

なんとくさかりかるろやまニ

● 十二

一三 ● けさとうのこからすがつゆニ志よぼぬれてのう

うらうらとないてたつつゆニ志よぼぬれてのう

つゆニ志よぼぬれき京のそらて

● 十四

一四 ● けさとうのとはらわどごゑをりるやらの

はこやゑをりるやらをとりかこをにのうて

はこやもとりニちよすのみすと

十五

一五 ● 志よがみをばたまといれてなあ

さいりさいりとたまといれてなあ

けさのあさぢやニ志よがにようた

十六

一六 ● けさ田ゑをりときニもといをといたよな

そのかみさいてもといをといたあよな

さまニもううた志よのかみを

一七 ● あさねお志ようよりもきてをきをみやれ

さ月のさよゑがさよニこいたをみやあれ

さ月つきさよゑがあさふねこいた

十八

一八 ● さばいがみをなこゆゑなこゆわねわなあ

みやこめてたやなこゆわねわなあ

ゆわのかみをばねみたれがみて

おなごあさま志たきよりがみか

十九

一九 ● みやつかいを志よをよりわあかり志よう志のかけんて

かみけづりけわい志よよりわあかり志よう志のかけんて

けわいするニわななゑのびよふの

なんとひよふの志らゑニかいた

二十

二〇 ● 京く志こうてたもれ京く志こうそな

かみも志なやれ京く志こうそな

く志わこうたそかみかいけすれ

「六オ

二二●志よろけすのきわをみよよりもといきわをみやれ

こうばいちらたのがんぎむすたりのう

もといきわニわすりすみさまれ

二二●京のさとわけいさとからすかねつけてな

つばくらわベニをさすからすかねつけてな

こそてきるならからすもかねを

「六ウ

二三●つばくらわはねはへそろうてたつときわ

たびたちわやあれ志ないをやのみをくるしめ

はねをそろゑてときわのくにゑ

二四●むかいなるたいてらをけさあけてみたれば

うつく志きちたちがはなおりかさいた

はなをそろゑていまこそがくが

ちごがうつやら

「七オ

二五●おく山の小うさぎわなニをくうてこれまで

はぎやいさらめやつゆをくうてこれまで

つゆニぬれてわさん志らやまを

なんとうさぎのうわけわつゆニ

はぎのわきたちうさきかねふる

二六●うぢのちややまのちやゑんをみたれば

志んばもひらいてきもよいつみころ

なんとは志めニコもんのわきの

なんとをてらの志んちやわつゆニ

「七ウ

二七●天志うたい志んくうのみやニまいるときニわあ

みやがわをのりてゆくまつのみわ志つくれやれ

ふなつきわニわみことなふねが

それをこぎわけとうりいのなかゑ

「八オ

二八●天志うたい志んくうのふねニめすをりニわあ

つつみうつなふゑふくかうたよみかけんなあ

てうちかけてわあんのニのりた

なんとのりてわくわんのうかぢを

二九●天志うたい志んくうのをこさふねををがま志う

志ろかねのほぼ志らニコがねのさわをさすとのう

たゆうどのニわみことなゑぼ志

からのゑぼ志ニ志んくのふさが

なんとせんだうがくニわこころ まようた

「八ウ

三〇●さんばいのやあれうふゆのみすわとこ志みす

とこ志みすやあれやまとのく二のいわ志みす
ななとうぶゆわいなつるひめと

* 右の哥わ朝五ツ時迄二うたい申事なり

* 右の哥うとうて三ばいまつり此所にてするなり此時辰の時な
り田うへ人東方へ立ならひさかさ致申事成
「九オ

三五●うくいすとゆうとりわ京かるやまのとりやれ
京かるやまへかくれてわかよむとりやれ
二氣をあげてわうたゑやのべニ
「十ウ

三二●さんばいわやあれとちからおりやるみやのほうから
みやのほからやあれあ志けのこまニ田つなよりかけ

田つなよりがけいままさんばい

三六●けきまいたもみたねわなんとまたいたもみたね
* 田いたんニせんこくところあての靱たね
「十ウ

あ志けこまニわ田つなニこころ

なんとよいたねほ二てて志わり

三三●さんばいをさんばいといわうかみなればのう

そのかみのせてたもうれのうやをさんばいやれ

三七●つつみうちをこいゆよりかたのつきをみやあれ

のせていさま志よさんはい志よどく

「九ウ

はんはんとさかわさけかたのいろつきやれ
かたのいろつきをもうたほどニ
「十一オ

三二●さんばいのをりるやるつゆをこきわけてのう

ニ志きのきやはんてあやのこがさめすとのう

三八●つつみうちのふどうさゑもんかねのやくのか志わら

さんばいたびゑこさるかちんのはばき

志郎らもたらもけいこせすわかなうまい

ここニぬぎをくかちんのはばき

つつみうちよりたたかねつきニ

三四●ひいわそぞれたこうなるこの田ニこうそな

* せんニのせいをそろへこの田ニこうそなあ

「十オ

三九●京うのよ志田のみやへまいるときニわあ

せいをそろゑてうようやこれの

は志をわたるニゆくとときニさきニもんがあるとのう」十一ウ

ここわみちばたゑニかくほとニ

みやのもんニわみことなすぎが

四〇●あさをのたねとてけさもまいたあよなあ

やよめのをさをばたれ二こいかるう二

あさばがふたば二ならば

かりてをりたやあねこのもの

四一●むかいなるはたや二はたをたてをいてのう

まねきたてたよはたたてをいてのう

はたをを志たてべいぜいののを

ののををりてわ

をる二をりよいたたい志ぎの

四二●藤^{はじ}のやまのをき二こそふねがと^まうり候よ

ふねがと^まうるさき二こそまつやまがみゑるそ

藤^{はじ}のやまかやもとからつぢゑ 九りある

藤わをうやまふもとをみいか

四三●けいさとうのあさがわ二つるまきををといた

つうるまきのさたもないご志よかみををといた

むこ二みせたいをうやまふじの

むこ二もた志よう志けどうまきの

むくげまいかけかりばのてだち

四四●さも志かがやあれさ志こめられてうたよむ

そのをやをやあれゆくかたのうてさも志かが

十二オ

さ志やこめられべんかもわかも

志かのはらげをぬいてわふて二

ふて二いうてわみなほききようを

四五●むかいなる志ばやま二志かがよむこゑやれ

ないてそうろないてそうろみこへないて候よ

みこゑはんなくよこへとないた

志かのはつこゑまゑ二わかわけ

四六●かい田のをき二こそ志かがう志てそうろなあ

ゆみやをそろゑて志かがふ志てそうろなあ

志かがふ志たそをうて二まわせ

ほ志かいてとれあをな二志かが

四七●をもしろいものふ志のまきがりのう

ゆみやをそろゑてふ志のまきがりのう

ふじのまきがりみなさむらゑて

十四オ

四八●おきの田なかのくろわな二くろやれ

きようの田ぬ志のときのまゑのくろやれ

なんとみゑたわあれかやとくの

四九●か志まのみやゑこそまいるひともあるかや

まいるたひたひ二か志ま二こうそなあ

十三ウ

かみをまつりてわれこそふくを

「十四ウ

たなをかけてわから天ぢくが

五〇●京の田ぬ志のをくのまをみたれば

十二のこちよう志ニたまの志をいれてなあ

田ぬ志くらにわいづみがわくと

なんと田ぬ志のすがたをみれば

五五●一、い、ひつやつやこぜんかいわ九、のツのう

それもるままよちよもへいすべいなあ

かいわ九、のツもりよるうちがうとくな

ちよがへやげてかい九、のつて

「十六オ

五一●京うへのぼるみちニこそふ志ぐるのいねやれ

いねがさんはニこめがはちこくよ

なんとよいたね三合まいた

かぶがさきそろけニよいいねが

「十五オ

五六●一、ひるのつうぢのかあさをばろくニきやれそうとめ

のうばニかげをさすろくニきやれそうとめ

ろくニきやれやのうばニかけを

*右之哥四ツ半迄之哥也

*四ツ時迄のうたなり

五二●口の志ろいこぐちなわがかみのかぎをくわゑて

それを見てかんぬ志がかみのをひらくよ

かみのとびらをひらいてみれば

五七●一、をきのはまの志をくまばたこにてをかけてのう」十六ウ

たつなみを志のけてたこにてをかけてのう

そへて志ん上あかりの志をヲ

五三●よ志ののみやニこそとのわまいり候うろな

はなをりいこやまいりそうろもうやれ

はなををりてわよ志ののみやニ

「十五ウ

五八●一、ひるまをまつただをきのはやふねニのう

ほば志らを志たててかぜをまつことくなあ

ひるまふねニわ志んそうふねをのりたす

ひるまふねとてせんこくふねをまわいた

「十七オ

五四●一、をきの志まのとなかニたなをかいつれいてのう

日本こくがみなみへるたなをかいつればのう

五九●一、ひるまもちのこぎるやるあかいかたびらてのう

ひいらり志やらりとあかいかたひいらてのう

あかいかたびら五メニこうたそ

ひるまでのうたなり

六〇* 一、とふどふによね千石せんごくをかせいだ

かせぎをきてわこの田にこめがせんごく

よふじぎになるの八天てんじくのびわの木

よふじぎ二なるのわてんじくの志でのき

「十七ウ

六一 一、志だれやなぎわよふじぎによいとなく

けづりみやすてよふじぎによいとなく

天ぢくの龍りゅうの白しろひげよふじにけづり

うとく大名だいみょうわ金のよふじヲくわへた

六二 一、をもう柳わかとたにこうそな

枝*たもさかへるかとたにこそそな

柳うゑまへやなきか志ゆんたれ

「十八オ

六三 一、ひる田へをりるとて中*のかけうをといた

けう田主わ金のよふじをくわへた

よふじぎにわなる天じくの志でのき

六四 一、梅の下まりをとんとけたれば

梅わばらりこぼれるまりわやなにとまりた

「十八ウ

とんとけあげたまりをハ志*よすよふける
く、りばかまてまりけるとのこいとふしい

六五 一、五月そふとめ梅はまいるまいかの

梅ハすいしはがいしも、ハにがいのものやれ

梅をまいれや梅はこゑかよふでる

六六 一、京の町の梅うりとばんどう山のなすびと

それ買てくわいてハ*さいさいうくと

買てまいれや天神をしむから梅

「十九オ

六七 一、梅のにをひ尋て末まわれうぐいす

いうにまわれ鶯*尾お ちらすな鶯よ

にをひたすねてこすゑをまわれ鶯

鳥となりてもをていのかこにすめかし

こゑがかれたかうたへやのへの鶯

「十九ウ

六八 一、京にこそならにこそを*てらし二こそそな

はすのはなやら花ハさいたりのふ

かさとしたのむそのふやれ小いけの蓮の花

池かくろうて小池の□*のかけ二なる

六九 一、田主のせ戸田にさくわ何の花やれ

い、のはな酒の花さけば徳の花やれ

蔵に余りて錢をは車につむもの

「二十オ

七四 一、をなりはきたやこぜ白かたびらいてのふ

よいかたひらのすそへくれか志み候よ

くれか志み候よひかたひらのそ、へ

なんとおなりによふた花のかたひら

「二十一ウ

七〇 一、此田にさくわ只志は草の花やれ

手ををりゑてのふ御所へ参ろふやれ

御所へ参るにあをいの花を手に持

* つ、でつばきは咲てわ山をてらいた

なんとうの花七志ほさいた田のさご

七一 一、とびくまい上ルねつみやきてつきあけふ

志らひよふじとのこそまいの上手て

* うしとてまわせふこんごふ兵を衛になろふた

「二十ウ

七六 一、酒はくる肴わなくしてちしやのは

志んちやのはをすあゑにして御肴

酒の肴にくわたんの志てのちんちや

なんと肴にきよふあさまめの塩つけ

なんと肴にごもんのわきのちしちやを

「二十二オ

七二 一、天じくのやれたかまが原てひるねして

ひるねしてやれおもふとのこを夢見た

おもふとのこを夢二わ見たかうそかな

ゆめかうつ、か我かきみさまのすかたが

七三 一、沖の船のせんぶどの、ひるのね事に

天目八ツにはちましかねか十六丁やれ

なんと船どふねごとかさめてろうおす

なんと夢かやきたとは見たか

風かよければ舟子もいさむ帆上

なんとせいだせはりまなたへいふつく

はりまなたへははるくとい、かつかうか

「二十一オ

七七 一、三ばいにやれ御酒参ろやよいさけ

やよい酒やれ長糸のてうしちよかさかつき

さんばいの御酒を参ル砂田に水引んた

さんばいの御酒を参ル長糸のてうしで

「二十二ウ

七八 一、京のとうと二酒をまいらせふやれ

いさみまいれやちよのさかさすきのふ

なんとさかなにまひとつやけや此志ろ

七九

一、ちりやあれく小賣酒をちりやあれ
ちりもあらばのようよ我がのもふよ
のふてよわぬわみなかい酒の習か

「二十三オ

八四

一、栗の花やら志ぎよふさいたよのふ
なるふならじは花にといたまへ
栗の花やら志ろふてはおすなちようたの
なるふとてやら小すへ二花かつほふたり

「二十四ウ

八〇

一、十二の御でうしに玉のかわらけにのふ
田主との二参らせふや京の御いわいにのふ

志やくをとらしてまいれやからの菊酒

酒を呑では只いやことをいわれた

酒を呑てはなんぼふとうとかいそめく

「二十三ウ

八五

一、扇の骨やごせ七つけつりてのふ
七つけつりてかなめとんとうや
かなめみことや扇はかざしまいらせふ
をいにほれては七つを八つかそへた

八一

一、をなりはやれとこ迄おくるへしせきう山
せきう山二せでらもろすみほうらかせき

をくりたけれとせき山三里かとうて

なんとおそろしせき山三里かまつ山

をくりかみとてまよふてきたとおもふな

八六

一、扇わ巻本也君はふたりなりのふ
さかふやく中をとんとさかうや
中をさかふや扇のきみのお志へぞ
さくにさかれぬ扇のきみわふたりぞ

「二十五オ

八二

一、奥山野五月夫女ハとちに花かさいたそ
さいてそろく八重に花かさいてそろ

なんとみことなこすへに花かつほうた

「二十四オ

八七

一、そら色の火扇に月のわをかいてのふ
それをかいたとのこは心にくいとどのやれ
なんと扇の志らくへにかつた系女房

八三

一、極楽たきみやこせ我がうやしきにのふ
松に竹に柳にわかうやしきにのふ

八八

一、扇のかさしより竹のかさしこそなあ
すんずしけれと竹のかさしこそなあ

「二十五ウ

竹のあいからすんずしからふ風かふく
とのはかさめじわおふわおふきをかさし
風かふくならすんずしかろふ風ふけ

八九 一、扇さしあけまいまふ時ときには

てん志よふにふゑをふくならかくニ合せ
かくにあわせてまふては寺のちごたち
扇さしあけおもいしかたへそてふる
「二十六オ

*
八ツ時迄の哥

九〇 一、さ月そうとめ今こそみたれたすがた

さ月そふとめまゑたれあて植てなよ

九一 一、あいの花はさいたかなにそめとてのふ

かりふはかま染そまとてはもぬふたりかな
かりよふはかま染るとてかやあい取とりよせ置おいた
なんとこうやかあいとりよせをいたそ
「二十六ウ

九二 一、そうとめさ衣染えそまやほしたそのふ

はきの花色ほしたよのふ
染てをいたそうらやのかきにかたひら
かちんまいたれこんやのよめかむすめか

九三 一、京の町のこんやとの高いもかれてのふ
そめやをいたそたかいもかれにのふ
はたとあわせた大ぐい先の水しま
「二十七オ

九四 一、先牛さきうしの角つのまきにかりふびんととまつた

極らくの鳥やらかりふひんととまつた
かりよふひんかよいつのまきとまつた
おりて見たれハひよふとふ繩なわかけけるそ
*
「二十七ウ

九五 一、天ちくの八か市てほらかいを落おした

それをてんでにとめいてわ何をてんでにとめるに
ほらをひらふて山ふしとのかいをうた
「二十七ウ

九六 一、春日かすがの宮みや二こそまいやかくらあるとの

さあまいろふやらまいや神樂あるとの
志やくま笠かさきてまいるふかすかの宮みやゑ

九七 一、七九くだん竹ハうをつり沢さわ二よいとの

志よふよしふへ二よし魚いさなつり沢さわよしとの
なんと沢さわ二はくたんの竹かよしとの

九八 一、山家やまが田植たえうれは何をそろしうてのふ

うさきかつ、みうツさるがき、らするやら
奚こはほり田たそみもいれつ、もかさなれ
「二十八オ

よういれとおもふはことしの稲のは色よ

九九 一、人のふりをみうよりそてのふりを見やれ

そてのふりをみゆふよはあいけう苗植やれ

なんとうへさせふあいきよふ苗のてふ^切ふ

いそき植され相京苗のかさるに

一〇〇 一、馬のり三人とふるがとれか万十郎やれ
「二十八ウ

こうはいにぶち午に中か万十郎やれ

* あんとのりたやこうはいいたつなふち午

きみかめすならいそけやさまれぶち午

一〇二 一、京系登ういそふさいりく^と

さいりくゆけばこそ大坂えつこふや

登つきてはろふか二こしをかけうや

こしをかけてはみせんに松か若やぐに

一〇二 一、京へ登かたれをときにせふかや
「二十九オ

となりの才太郎をつれて登れかしのふ

つれて登て京清水寺をみせうそ

奥のいん迄まいれやとくをたもうる

一〇三 一、登やるくだるやるあいか三つつれでな

せういろやせうすもうやふち八け二いすやれ

なんとにごすなあい取川のかしらをば
あいの白くしめ元の小志わ二まよふた

一〇四 一、きよふの田主わ田のさこ植てぬふ
「二十九ウ

八ツなみ蔵を立德をまねいたよな

作りなひけて四方二蔵を立たそ

蔵を立ては一村长者とよわれた

蔵のかきをばげに京かしかよふうツ

蔵の戸ひらけ千石船をこきよする

舟かよりしてはこなたの蔵にはいるそ

一〇五 一、時鳥はなにもてきたなあ

との舛にとかけにたわら持ちよなあ

たわら持きて戌亥のすま二積との

稲かよければたわらをあつめや善徳

「三十オ

一〇六 一、我等がとのこわ京て小草かるとな

* 石志よふやこま草や品のかやを^{かま}疳とな

我等がとのこわ小草の役二さ、れた

我等かとのこわ石志よふ小草かるとの

我等かとのこははりまの志ようから

我等かとのこ^因の、役二つかわれた

* 鷹はかひものそれはを^野の野二ねる
君もねかふてたかの^野をやみよふそ

「三十ウ

一〇八一、我等らとのこはきのふ京に志やるやる

きのふきた^〇ろなはりまなわてをな

はりまなわてゑめくれはとふし

*廿五^〇舟こけば廿^〇じまわりなり

まわりなれどもひとたびめぐりあをうふ

めぐりをふたぞわかうきつまかなつかし

一〇九一、京の町の志よろたちきぬかつま二な二あれ

すみす、り筆あれからくれなゑの帯^{せび}ヲれ

すみ筆かなふみかきやるふとほもふた

すみ筆かなこひしとはかりこふ二

「三十一オ

一一〇一、大礎^{おほいそ}の寅^{とら}御^ご前^{ぜん}わこひに志つんたかな

そか野^の重^{じゆう}郎^{ろう}にまいらせふや恋^{こひ}ひのなくさミ

なんと寅^{とら}こぜこひしとまりをもふた

なんと寅^{とら}こぜ恋^{こひ}をばやめてたもられ

なんと寅^{とら}こぜか^かいこふ武^ぶはんのか志^ころ

一一二一、京の町みさいやれ大こん寺こそそな

七ツならべて大こんし二こうそな

町かたてかしいれこのはちうろふ

「三十一ウ

一二二一、京の町の志よふろたちわはかま立^たの志よふす
やを物立たり八よ二へたを取との

我等かほかまへ^〇重^〇のへたお取との

一二三一、将^{しやう}棋^ぎは差^さたれと盤^{ばん}の目をしらいて

十二のさいハもれとばんの上をしらいて

上手^{じゆうず}ならはんの取よせてさそうや

「三十二オ

一二四一、志よ儀町の武けん目の左り小路^{みち}にのふ

将棋^{しやうぎ}さしたり碁^いうつたり左り路^ぢのふ

我等かとのごわ中飛^{ちゆうひ}の志ようつ正^{ただ}きさし

一二五一、天王寺のみとうのむねのかやかたらいて

それを天てにからいて何を天て二かろや

なんとみとふの三把^{さんば}のかやかたらいて

*右^{みぎ}のうた七ツ迄^{いた}二うたうなり

一二六一、なんと女子^{むすめ}二てるひにかさをきせいて

かさかないとてかさやのかとにた、れた

「三十二ウ

一二七一、きのふけふからくたるやら白^{しろ}いすけのかさをは

我等^{われら}ニきせいて白^{しろ}すげのかさをは

我等^{われら}にきせうとてきふそのかさ買^かたそや

かさわとふかさ志^{こころ}めをわ三島^{さんじま}八^{はち}ツ打^{うち}

かさでもきよいわたいせんかさのあやのを

二二八 一、き野昨日ふ見て京みれば門の松か高いそ

高いこそとふりや徳のかさかまさりた

松か高て天まう鶴をかくいた

なんとから松いなかのすきに最＊わた

「三十三才

二二九 一、ほと、きすは小すけのかさをはかんたんふけ

寒たんむけてきけともこへせぬ時鳥

ほときすは小すけのかさをかたむけて

我にしなへハ相そふこすけのかさきせふ

二二〇 一、せまいせうじのからかさをはな

差上ケてさいつれてさいて通り候よ

なんとすほねてかたいてとふれからかさ

「三十二才

二二二 一、きのふとふるからかさきよふも通り候よ

とふらはとふれかしたれかむこ二取うや

なんとむことのさみたれかさをさ、れた

二二三 一、向成るからかさはなにからかさかのふ

さ月あめのからかさわ何からかさのふ

なんと見やれやさみたれかさヲさ、れ

わかいとてみされやかさのけせふをはの

「三十四才

にしきのゆたんかけヲかのこの川つ、んた

との、をいをは京白川てつ＊かんだ

二二四 一、はんくわんと、あかし下りをいわ何てつ、うた

あや、にしきてた、つ、うたりのふ

をいの中には志のびの小刀もたれた

都立出てあかしの志くにつかれた

二二五 一、ていのちりもとりたりた、みさかひたりのふ「三十四才

あれいとおりそうろよこなたをなり候よ

かきやならへたこうらいべにのた、みを

二二六 一、あきんとをこいるかやせんたひつをこいるか

せんた櫃の中二ある花＊むさきをこいるよ

櫃の中のなる花ひしのもののかたひら

何ときせいて＊いよりかけのかたひら

何とまよふた花むらさきの色には

「三十五才

二二七 一、つくし船のろの上に羽根の白鳥やれ

口はにしきあしはれんけはねの白鳥やれ

羽根の白いはみやこの鳥の＊なかいか

二二八 一、京の八幡のむろのはやしにのふ

鳴ひよとりをはなにをこいになくやれ

二三三 一、京から下ル京はん所のをいは何でつ、んた

ひよくくと鳴はひよとり小池にすむかをし鳥 三十五ウ
なんとおし鳥たつとも跡はにごさじ
をしのおもひはね一すけほしやとたのん*

二二九 一、京の八わたの松の小枝にのふ

鶴かすみそう松の小糸だにのふ

鶴のすこもり八わた松の枝には

松の小糸たにけにすみよいかや鶴の子

松か志けりて八わたのば、くらいそ

二三〇 一、おていとのかまわとこにつないた

うねをこし谷をこし下り松につないた

いさむ駒をはのきわの松につないた

駒かいそふてのきわの松をかやいた

「二十六オ

二三一 一、あしけの駒か志きよふさいを見てハな

くつわかみをすやら志きよふさいを見て

いさむ駒をはよふのりとめた多四郎

二三二 一、大ひわめニも小ひわめもひわなかりけり

ひわよいく小ひわよいくひわとこに置たか

夕□の所にこそ志らひよふしのおでに*

ひわをわすれてこで志らひよふしのおいでに*

かくのかしらをわすれてきたものおていに

二三三 一、奥山の山寺にちこかふみをかくとの

すみふて手にかみへをくうとの

文にうはかき見事ニかくしやりさよ

なにをくわれハ庄屋かすたれおろいた

かさきこばいてまいろうさじのみとのへ

「三十六ウ

二三四 一、か□ふくしやうの香ばこにふみを取そへて

おもふとのにまいせふや文を取添のふ

あけてみたれハこひとの玉すき

二三五 一、うつくしきすあふかみをたもとへ入てのふ

さいりくくとたもとへいれてのふ

日くれかたにわすをふのかみかこひしや

われかおもふハ蘇村の玉へわる竹

「三十七オ

二三六 一、たちうろやくさやもないたちうろふ

くまのかわの新さやかけたさやのないたち

立わ買ったか森り山たちのほそみヲ

志よぶこたちに雷みのたちかかよいもの*

二三七 一、おなりわやれとこまでをくるしか志まへ

かじかしまいやれ情のたねとてなるい迄*

おくりつめたそれ宮兵庫の突しま

もの、ひことな兵庫と西のミヤ

「三十七ウ

二三八 一、西ノ宮には獅子かまひそうろよ

みこのすかたて志しかい^{*}そうろよ (以下異筆)

二三九 一、八富原のはん蔵めか日でびわをといた 「三十八オ

志ようじく志よぜんほふかほつあたまるくとや

なくなげくなひわかいやるそ

びわをもとめてわろふてひくそ

一四〇 一、ゆんへなけたすぼくそわたれがなけたすほくそ

あめわふる風ふくころとなけすほくそ

なんとすぼくそなげれはいぬが くうよ 「三十八ウ

(以下に余白なし)

(裏表紙なし)

補注

*一 まいらしよう——この文字は追記のよう。

*二 二ばん——この字追記。以下「三ばん」「四ばん」「五はん

「六ばん」「七はん」「八」「九」「十」「十壹ばん」「十

二」「十三」「十四」「十五」「十六」「十八」「十九」「二

十」のみだしの文字は、追記挿入の形になっている。

*三 みよ志よう——みよう。志よう(明星)。

*六 ちよすみす——ちよう。ず水、「う」脱か。

*七 こいるか——この文字、追記。

*一五 たまと——たもと(袂)。こ志よ——こ志よう、「う」脱か。

*一六 もとい——元結。

*二一 ちらたの——散らいたの、「い」脱か。むすたり——結す

うたり、「う」脱か。

*二三 志ないおや——やしないおや(養い親)、「や」脱か。

*二七 とうりい——鳥居。

*二八 くわんのう——くわんのん。(観音)か。

*三〇 「右の哥うとうて……さかすき致申事成」——この文言二

行にわたり、小文字。

*三四 せんニの——せんにんの(千人の)か。「右の哥わ……」

——この行、小文字。

*三六 田いたん——田いつ。たん(田壹反)か。

*四二 藤——「富士」のことか。みいか——新宅屋本雙紙では

「三日」。

*五一 「四ツ時迄のうたなり」——小文字。

*五五 「右之哥四ツ半迄之哥也」——小文字。

*六〇 以下筆蹟が変る。

*六二 以下、原本はコウタを一字下げて書いているが、本翻刻で

は六一以前と同様、オヤウタと並べて表記した。

*六三 中のかけう——「中のかげご」か。

*六四 志よす——志ようす(上手)か。

*六六 さいさいうくと——新宅屋本雙紙では「いささいりく

と」。

*六七 尾——「はなを」とふり仮名がある。「花」の誤字か。

*六八 をてらしニコそ——新宅屋本雙紙では「小せふじにこそ」。

□のかけニなる——□の文字は魚の名、新宅屋本では「ふ

な（鮒）。

*七〇 つ、でつばき——新宅屋本雙紙「つ、じつばき」。

*七一 うしとて——新宅屋本雙紙「しとて」。

*七六 くわたんの志でのちんちや——新宅屋本雙紙では「くわたんのしたのちん茶」。

*七九 のようよ——新宅屋本雙紙「のもふよ」。

*八一 せでら——同前「せきでら」。

*八三 極楽た——新宅屋本雙紙「ごくらくは。うやし——「植えし」の意か。

*八四 志ろふてはおすなちようたの——新宅屋本雙紙「しろいはをすなちようよ」。

*八七 かつた——「かいた」か。

*八九 「八ツ時迄の哥」——小文字。

*九四 けけるそ——「かけるそ」か。

*九九 みゆふよは——新宅屋本雙紙「みうより」。

*一〇〇 あんとのりたや——新宅屋本雙紙では「なにとのりたは」。

*一〇六 石志よふや——振仮名があるが、「せきせふや」（新宅屋本雙紙）と読むべきか。

*一〇七 我等かとのこははりまの志ようから——新宅屋本雙紙では、この行以下が一章をなす。歌詞番号一〇七を設けた。

〔六〕の、役——新宅屋本雙紙では「たか野のやく」を〔六〕の野二ねる——同前「をくののにねる」。たかの〔六〕をやみよふそ——同前「たかの（や）くおやめふそ」。

*一〇八 廿五の舟こけば廿〔六〕じまわりなり——新宅屋本雙紙「廿五

日ふねこけは廿日じまわりなり」。

*一〇九 こふ二——新宅屋本雙紙「かこふに」。「か」脱か。

*一一〇 まりをもふた——新宅屋本雙紙「はかりおもふた」。かいこふ式はんのか志ろ——新宅屋本雙紙「かいとふ二ばんの上ろそ」。

*一二四 小路——「路」の左に「じ」、右に「みち」のふりかながある。中飛の志ようつ正きさし——「中飛の上手、将棋さし」の意か。

*一二五 「右のうた七ツ迄二……」——この行小文字。

*一二八 最わた——新宅屋本雙紙「さもにた」。

*一二九 つかanta——「つつanta」か。

*一三六 花むさき——「花むらさき」か。いよりかけ——「いとよりかけ」か。

*一三七 なかいか——新宅屋本雙紙「ならひか」。

*一三八 たのん——新宅屋本雙紙「たのみよ」。

*一三九 すやら——新宅屋本雙紙「するやる」。

*一四〇 夕□の所にこそ志らひよふしのおでに——読めない□は「ア」の字に似る。新宅屋本雙紙では「ゆふへ」おいでに——「おていに」の誤りか。

*一四一 志よぶごたちに圍みのたちかよいもの——新宅屋本雙紙

「しのふ小太刀にほそみのたちよいもの」。

*一四二 をくるしか志まへ——新宅屋本雙紙「おくるかかしあしまい」。なるい迄——同前「なるは兵子」。

*一四三 かいそうろよ——「まいそうろよ」。

* (以下異筆) ——

以下二連の歌詞があるが、いずれも覚書き風のものとも
た。後日追記のものか。

(以上 久枝秀夫)

解説

(一)

文化十四年書写「中野・新宅屋本『歌乃雙紙』」(以下「新宅屋本
雙紙」と略称する)に代表される田植歌本の系統には「青笹・上大
江子本」「矢上・清水屋本」「中野・有久本」「中野・藤下本」が
あり、さらにこの系統はやや歌の組織や歌詞の構成に簡略化の見ら
れる明治期の実用本「中野・新宅屋本『田植歌双紙』」(以下「新宅
屋本双紙」と略称する)までの伝承のあることが知られている。¹¹⁾と
ころでこれ等はいずれも島根県邑智郡石見町という限られた地域の
ものに止まっていた。今回、久枝秀夫氏によって本書、「大朝町宮
迫・小切本『田植雙紙』」(以下「小切本雙紙」と略称する)が発見
されたことよつてこの系統が石見町にとどまらず広島県にまでわ
たるものであったことが確認されるにいたつた。もつとも、久枝氏
の解題にもあるように本書所蔵者の先代、小切礼太郎氏の妻は石見
町日貫(「青笹・上大江子本」の伝承地)から入嫁されたというから、
この本またはこの本の祖本はその関係で石見町からもたらされたも
のかもしれない。

この系統の田植本に見られる田植歌は「田植草紙」に見られる田
植歌と同じく「オロシ構造」——「オヤコウタ」(まれに「ユリウ

タ」以下「オヤコウタ」で代表させる。)に「オロシ」を添える詞型
——をとつているが、各歌における「オロシ」の添え方と、各田植
本における歌の組織の仕方(歌の配列の仕方)に「田植草紙」と異
なつた特徴が見られる。したがつてこの系統の田植歌本の文芸性を
考察するにあつては「オロシ」の添え方と歌の組織(配列)の仕方
との双方に注目する必要がある。

歌の組織の仕方は「田植草紙」が全体を朝歌、昼歌、晩歌に分か
ち、その中を更に朝歌一番、朝歌二番……と計十二番に分かつ
のに対して、この系統の田植本では「五つまでに歌う歌」、「四つじ
ぶんの歌」、「昼の歌」……などの如く、歌う時刻によつて分けて
いる。それぞれの歌の配列から読み取られるストーリーやイメージ
の展開も「田植草紙」の場合とはかなり異なつており、この系統独
自の文芸性を認めることが出来る。

次に「オヤコウタ」に対する「オロシ」の添え方は「田植草紙」
が、飛躍の大きい、どちらかといえばやや難解な、あるいは詩的な展
開をとるのに対して、この系統の田植本では意味的に自然な、どち
らかといえば散文的な展開をとることが出来る。以下には、
「小切本雙紙」所収歌の文芸的な特色について、右に述べた二つの
観点から「新宅屋本雙紙」と比較しつつその一端を考察して置くこ
ととしたい。

(二)

まず組織であるが、「新宅屋本雙紙」が冒頭に「三拝由来書」を
置いているのに対して「小切本雙紙」にはそれが無い。「小切本雙
紙」は表紙もなくいきなり第一番の一つ歌(歌い始めの祝い歌)か

ら始まつており、冒頭部分が脱落したのかそれとも最初からそれがなかったものかいずれとも判断がつかない。「新宅屋本双紙」にも同様に「三拝由来書」がないが、実用的な田植本の場合それがないのが普通であったのかもしれない。

歌い出しの「一つ歌」(歌番号1)は「新宅屋本雙紙」では二十四句あるが本書ではそのなから十二句が抄出されている。配列順も異なっている。元来「一つ歌」は田植作業の出だし(朝の出がけとは限らない。昼飯のあとやはしまのあとなどの出がけも含む)に歌われるものであつて「オヤコウタ」や「ユリウタ」のように固定したまとまりを持たず、「さげ」(音頭取り)の裁量に委ねられるものであつた。十二句が抄出されたとはいつてもそこには「新宅屋本雙紙」の1に含まれていた、①田の神への挨拶、②田植作業をする早乙女や太鼓役の人々等への賛美、③同じく旅早乙女への賛美、④音頭をとる自分についての謙遜と断わり(一歌の草紙が手元がないのでうまく歌えないという主旨の謙遜と、草紙の大工一師匠というほどの意かゝりが出るまでのつなぎに歌うのだという断り)の全てが落ちなく含まれていて、田植歌並びにそれが歌われる場面に對する把握の仕方が変わらなず伝承されていることが知られる。

次に2以下の歌の配列については久枝氏の整理(表1)で明らかに「小切本雙紙」は「新宅屋本雙紙」の配列をよく受け継いでおり、この系統本の中でもこれほど配列の似た本は他にない。中でやや相違が目立つのは「四つ時」以下「ひるまでのうた」(「小切本雙紙」52から59)までの部分である。51までのおおむね忠実に「新宅屋本雙紙」の配列をたどつて来、昼歌に至つて急に大きく省略を

行った感がある。60以下はそれ以前と筆跡が異なるが歌詞については51以前よりもいっそう「新宅屋本雙紙」に忠実で、ほとんど「新宅屋本雙紙」後半部をそのまま写したといつていいほどである(久枝氏解題にも言及がある)。

以上、「小切本雙紙」における歌の配列を「新宅屋本雙紙」との関係で見ると、「新宅屋本雙紙」の配列をほぼ忠実に受けた51以前の部分、大胆に抄録した59までの部分、そのまま写した感のある60以下の部分と三部に分けてとらえることが出来る。

このうち第一部では、「新宅屋本雙紙」6、16、40が脱落(4は「新宅屋本雙紙」では33に重出、13、14、28の順序が入れ替わつてゐる。6は、共に「思う殿御との逢瀬」を歌う5と7との間にあつてそのイメージを細叙するものであつた。また40は、共に「鼓打ち」のことを歌う39と41との間にあつてそのイメージを細叙するものであつた。「小切本雙紙」はその細叙部分を簡略化したものといつていいだろう。これらは1の「一つ歌」二十四句を抄録して十二句にするのと同じ方向の改編であつて、このような点から「小切本雙紙」を「新宅屋本雙紙」に比べて略本的な性格を持つものと見なすことが許されるだろう。

「新宅屋本雙紙」12は「今朝とうの殿ばらは馬に乗り連れてな……」、13は「今朝とうの殿ばら何処ひ御座るやの……」、14は「今朝とうの小鳥は露にしよぼ濡れてのう……」と続いている。「小切本雙紙」ではこの13と14とを入れ替へている。これを入れ替へると素材の連続性が失われ全体としてストーリー展開がたどりにくくなる。「小切本雙紙」においてこのような物語的展開への関心が薄

くなっていることを示す一例であろう。「新宅屋本雙紙」28は「今朝霧のまきものに(紛れに)の誤りか)雉が鳴いた殿ばら……:」

という歌である。「小切本雙紙」はこれを11に置いている。この歌は素材内容からいって「小切本雙紙」の位置にあつていっこうおかしくない。むしろ「小切本雙紙」の位置の方に自然さを感じられる。

次に「オロシ」の添え方に表れる文芸性の問題について見よう。

「オロシ構造」の田植歌において「オヤコウタ」のまとまりが安定していることについては別に述べたことがあり、「新宅屋本雙紙」と

「田植草紙」との間ではその六割強が共通していることについても指摘した通りである。しかし「オロシ」の添え方は「新宅屋本雙紙」系と「田植草紙」系とは全く異なる。一例を上げれば次の通りである。(表記については私に意味をとって漢字を当てた。)

朝寝をせうよりも起きて沖を見やれ (「オヤウタ」)

五月の佐兵衛がさ夜に漕いだを見やれ (「コウタ」)

五月の佐兵衛、朝船漕いだを見やれ (「オロシ」)

朝船に漕ぎや遅れて、船津に太刀を忘れた (「オロシ」)

太刀は忘れる、扇は町で落とした (「オロシ」)

(「新宅屋本雙紙」一八)

朝寝をせうよりは起きて沖を見よやれ

五月の佐兵衛がさ夜に漕いだを見よやれ

五月五月雨、寝乱れたらうものをば

船子ども、ただ磯崎に立たれた

乙毛が、刀の柄に縫れた (「田植草紙」八)

「新宅屋本雙紙」の場合は、色男佐兵衛の今朝の振舞いが時間的

な展開を追って語られており意味的にきわめて明快である。これに對して「田植草紙」の場合は行間の飛躍が大きく、全体として「しのびの恋の男女が後朝の心情をこめて舟着き場に現れ、やがて別れて行くといった場面」(真鍋昌弘『田植草紙歌謡全考注』一六四頁)をイメージとして描くことが出来ないわけではないが難解である。

この歌は「小切本雙紙」では次のようである。

朝寝をせうよりも起きて沖を見やれ

五月の佐兵衛がさ夜に漕いだを見やあれ

(「小切本雙紙」一七)

「小切本雙紙」17は「新宅屋本雙紙」18の「オロシ」二、三行目(これをイヤオロシ」ということがある)を脱落させている。そのため「新宅屋本雙紙」18に見られたような展開の面白さが消え、「コウタ」で提起された「さ夜に漕いだ」様を細叙するにとどまっている。この例でも見られるように「小切本雙紙」においては、「イヤオロシ」を脱落させることが多く、「新宅屋本雙紙」の場合と比べてみると、「オロシ」を叙事的な展開において添えていくという発想そのものは受け継いでいるものの展開の面白さに欠ける場合が目につく。

又、「オロシ」の歌詞展開そのものも「新宅屋本雙紙」に比べて単調になっている場合がある。一例をあげれば次のようである。

^Aこの里は化粧里、^B鳥、鉄漿付けてな

^C燕は八重に(紅?)^D指いて、^D鳶は小袖着るとな

^D小袖着るなら烏も鉄漿は付けやれ

年寄りの小袖着たより若いが布子目につく

(「新宅屋本雙紙」二二三)

京の里は化粧里、鳥、鉄漿付けてな

燕は紅を指す、鳥、鉄漿付けてな

小袖着るなら鳥も鉄漿を

(「小切本雙紙」二二二)

「新宅屋本雙紙」23の場合、歌われている素材(傍線部A~F)は図1のように配列、連結されている。一方「小切本雙紙」22の場合は図2のように配列、連結されている。

図1(「新宅屋本雙紙」二二三)

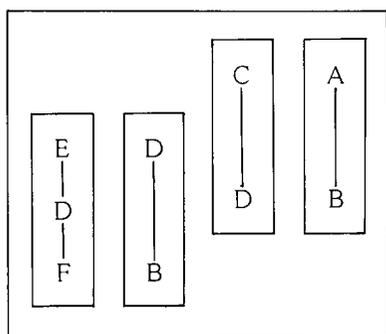


図2(「小切本雙紙」二二二)

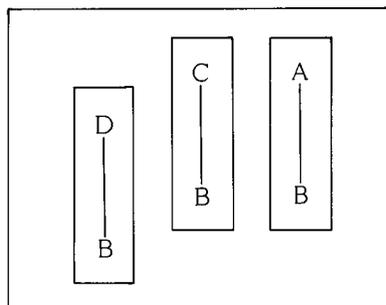


図1(「新宅屋本雙紙」二二三)では「オヤウタ」(A~B)と「コウタ」(C~D)で呈示された素材が「オロシ」第一行目においてそれぞれと受け止められ「D~B」という形でまとめられている。そのDは更に「オロシ」第二行目に受けとめられ、しかも「E~D~F」という意想外なイメージに展開している。これに対して図2

(「小切本雙紙」二二二)では「コウタ」の後半に「オヤウタ」の後半を繰返し、それによって「オヤコウタ」が小さくまとまってしまっている。また、「オロシ」において突然提出されるDが意味上処理されることがないので全体として歌意が難解である。

次に、「小切本雙紙」に見られる「ウタヅマ」の脱落現象についてふれておこう。今日、当地方に伝承される田植歌の歌唱法では7・4の詩型をとる「オロシ」の場合最後の4の句が歌い切れない。この最後の4の句を「ウタヅマ」と言っている。牛尾三千夫氏によると

「昔から心得たサゲなどは歌い終わった終わり、この歌い切れないウタヅマだけは口の内でごえで誦していたものと云う。又、「歌を咬む」と云って、歌の終わりの方を曖昧に云うこともあった。という。書写年代の古い田植本はほとんど「ウタヅマ」まで書き留められているが、新しい田植本では「ウタヅマ」が脱落している場合が多い。あるいはこれは近代になって当地の田植歌の歌唱法に変化があったことを示すのかもしれない。

宮仕いをせうなら明り障子の陰んで

髪けづり化粧せうや明り障子の陰んで

化粧するには七重の屏風の(陰んで)

なにと屏風の白いに描いた(絵女房)

(「新宅屋本雙紙」二〇、「小切本雙紙」一九)

この場合()内が「新宅屋本雙紙」にはあるのに「小切本雙紙」では脱落している。この歌の場合、()内がないと歌意が成立しない。しかし次のような場合は()内がなくても歌意が通る。

天照大神のお御座船を拝ませう

白銀の帆柱に黄金竿さすとの

大夫殿には見事な鳥帽子(狩衣)

唐の鳥帽子に真紅の房が(八つまで)

なにと船頭、楽には心が迷うた

〔新宅屋本雙紙〕三一、「小切本雙紙」二九

又、次のように「ウタツマ」がなくても歌意が通るように歌い変えている場合も見られる。

奥山の小兎は何を食うてこれまで

萩やいさらめや露を食うてこれまで

露に濡れてはさん白山を迷うた

なにと兎の上毛は露に(濡れたぞ)

萩の若だち兎がねぶり枯らいた

〔新宅屋本雙紙〕二六、「小切本雙紙」二五

右の傍線部を「小切本雙紙」では「兎がねぶる」とし、そこで歌意が完結するようにまとめている。

ところで以上見て来たような「イヤオロシ」の抄録や「ウタツマ」の脱落といった現象は「小切本雙紙」の場合、昼からの歌以下(筆跡が異なる)についてはほとんど認められない。後半部の筆録者の手元には古い祖本があつてこれを忠実に写そうとする姿勢があつたのかも知れない。

以上、「小切本雙紙」の文芸的な特徴の一端について考察した。「田植草紙」系と比較して「新宅屋本雙紙」系田植歌全体の基本的特質を明らかにしていくことが今後の課題である。

注

- 1 拙稿「中野・新宅屋本『歌乃雙紙』——島根県邑智郡石見町田植歌資料——」(『山陰地域研究(伝統文化)』第一号、一八八五年三月刊)及び「中野・新宅屋本『田植歌乃双紙』——島根県邑智郡石見町田植歌資料(Ⅱ)——」(『山陰地域研究(伝統文化)』第二号、一八八六年三月刊)解説。
- 2 拙稿「中野・新宅屋本『歌乃雙紙』——島根県邑智郡石見町田植歌資料——」(『山陰地域研究(伝統文化)』第一号、一八八五年三月刊)解説。
- 3 牛尾三千夫『大田植の習俗と田植歌』(名著出版 一九八六年六月刊)二六九頁。

(以上 田中 瑩一)